

目が見えないということ

金屋小・5 中川 紗綾

「これは何???ここはどこ?」

今、私はブラインドウォークの真っ最中です。手を伸ばしてもこれ
が何かがわかりません。いったいここがどこかわかりません。ち
よつと歩くだけで人とぶつかったり、かべにぶつかったりして転び
そうで、思ったよりも、不安で、怖くて、自由に動けなくて、目隠
しをはずしてしまいたいと思ったほです。しかし、これだけの大
変な体験したからこそ、四つのことを私は考えることができました。

一つ目は、目の見えない生活の大変さです。今回は校舎のよく知
っているルートで体験しましたが、知らないルートをとって知らな
い場所に行くともっと怖いだろうなと思いました。私は体験中に付
き添いの友達がいましたが、今いる場所がどこかわからなくなっ
てしまいました。だから、付き添いうの人がいても、大変な生活を
していることがわかりました。そして、目が見えることはとても幸
せなことだと感じました。

二つ目は、私は夏休みに読んだ本『ヘレンケラー』についてです。
読んだときは「目が見えないってどんな感じだろう」「目が見えな
いってどんな感じだろう」「目が見えないっていうのは真っ暗なの
かな」「自分は暗いところでも目が見えているけど、全く見えないの
かな」と今回の体験よりも軽く考えていました。しかし、体験後は
怖くて、けがをしそうで不安で、そんな怖くて不安な生活をヘレン

ケラーはずっとしていたのかと驚きました。私たちの体験はそれよ
りずっと軽くて、付き添ってくれている人もいて、耳も聞こえるか
ら、改めてヘレンケラーのすごさを感じました。

三つ目は、付き添いについてです。私が体験の時は付き添いの人
を信用していても、とても怖い思いをしました。そして、自分が付
き添い役をしたときには口では上手く伝わらず相手を挙動不審にさ
せてしまいました。そして、けがをさせてしまいそうで怖かったで
す。お互いの不安な気持ちをぬぐいさるのは難しいと思いました。
でも、ヘレンケラーは幼いころサリバン先生を信用していました。
そしてサリバン先生は自分も同じ辛さがわかるから手伝いたいと思
ってヘレンケラーを支えていました。これは、お互いを大切にする
ための、お互いを支え合おうという気持ちが必要であると思いました。

四つ目は、人の役に立つことです。私は前に、目の不自由で杖を
持った人が、横断歩道を渡っている場面を見たことがあります。目
の不自由な人が横断歩道を赤信号で渡ろうとしたとき、付き添いの
方が

「まだ渡らないでください」

と言って教えてあげていました。もし色々な事を教えてあげる人が
いなければ、目の不自由な人はひかれていたかもしれません。そん
なニュースを見たことがあります。だから私は、もし目が不自由な
方が、横断歩道で危なそうな場面を見かけたら、

「まだ赤信号ですよ」

など、声をかけて、少しでも目の見えない人の役に立ちたいと思
いました。

目が不自由な人がどれだけ辛いかどんな気持ちなのかを学んで、
困っている人のお手伝いできる、そんな人になりたいと思いました。